

【もちろん国家というものはどこの国もだめだと思う。問題は人間である。人間だけを取りだすと、日本人はまだまだ望みがあるような気がする。おとなにはあまり期待がかけられない。まちがった教育でだめにされてしまっているからだ。しかし、子どもにはまだ希望がつけられる。そのためには、いまのまちがった学校教育を変えていかなければならない】

数学者遠山啓のこの文章は、1976年のものである。

この文章で云われている（希望がつけられる）子どもは、今や（期待がかけられない）おとなになっている。

38年経っても、状況はちっとも変わっていない。

国家はだめだし、教育はまちがっている。

どうだめなのか、どうまちがっているのか。

その検証や反省が、まったくなされないうで続いてきているから、余計にたちが悪い。

いろんな犯罪が起こるたびに、国家はだめで教育はまちがっている、と感じる人たちは少なからずいるにちがいない。

しかも国家を支える者や、教育に携わる者が、率先して（統計的にはどうあれ、印象的にはそうとしか思われぬ）犯罪を犯しているのだから、当然そう感じるのが正常と云うものである。

国家より、まず教育だろう。

なぜなら、国家がよくなっても、教育がよくなる可能性は低いからである。教育がよくなれば、国家がよくなる可能性が高いからである。

鶏と玉子、かもしれないが、どちらにしろまずはきちんと飼育しないと、鶏も玉子も、煮ても焼いても食えぬ代物となる。

（だいたい人は知らないだろうが）どんな人間が教師になるかと云うと、それなりの高校なりそれなりの大学なりの、学校なりクラスなりで、「成績」と云う意味のみならず、総称するなら「人間性」と云う意味においても、下から数えて十人がそっくり教師になるのだ。

だから教師がまちがっているのではなく、（教師がまちがっているのは

当たり前) 教育体制がまちがっているのだ。

マーク・トゥエインは【ぼくは自分の教育を学校などに邪魔をさせなかった】と云っているが、立派な態度だ。

(だいたいの人知らないだろうが) どんな人間が議員になるかと云うと、それなりの高校なりそれなりの大学なりの、学校なりクラスなりで、「成績」と云う意味のみならず、総称するなら「人間性」と云う意味においても、下から数えて十人がそっくり議員になるのだ。

だから議員がだめなのではなく、(議員がだめなのは当たり前) 選挙体制がまちがっているのだ。

根本的に考え直さないと、「まだまだ望みがあるような気がする」だけで、本当はすっかり望みがなくなる時代がくるにちがいない。